

神神の薬草

野元 正

かつて

人は自然と話せた

海も 山も 森も 川も

すべての生き物 すべてものの物質

エスペラント語のような

同じ 香りを もつ

言葉を話した

でも

言葉は同じでも

それぞれ 違った こころ精神を

持って生きていた

互いにその違いを

尊重しあつた

それが 当然と思つた

海と 山と 森と 川は

すべての神神と

談合――

その恵みを
森羅万象と

争うことなく

分かちあおうと決めた

人は その話を 聞いて

ぶう ぶう と呻った

山を崩し 海へ運び

森を焼き 巨木を伐採 飽きなかった

緑の園は 黄土の廃園

湧水は枯れ 清流は濁った

山はガレて荒廃 川は憤怒の濁流

人は 神神を恐れることなく

破壊を 好んだ

幼児のように

ただ ただ 形あるものを

壊す喜びに耽る

破壊から

再生は なかった

人は 自然と話すことを
止め

自然との 共通語を 忘れた
人の間に 仲間しか通じない
多くの 言葉が 生まれた
そして 限らない 殺戮が
始まった 人と人の

人は 群れ 争う

源平のように

赤幟や白幟に集い——戦う

ヨーク家とランカスター家のように

赤薔薇と白薔薇に別れて——百年戦った

いつの間にか、

話せば 分かるが 死語

何処に あるのか

世界を席卷している

殺戮と 疫病とが すべて 終息する

そんな薬草

人知れぬ 鮮烈な 効き目の

今は 神神に 祈る しかないのか